白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.16　4～13（2011）

論文・研究ノート

コミュニティづくりとソーシャル・キャピタル
―小平市および品川区の調査から―

草野　篤子・瀧口　眞央・吉村　李織・瀧口　優・森山　千賀子

1.　はじめに

ソーシャル・キャピタル（Social Capital）という概念は，米国シカゴ大学のジェームス・コールマン（James Coleman）が，1990年に発表した「社会理論の基礎」（Foundation of Social Theory）の中で，使っている。その後，1993年に米国ハーバード大学のロバート・パットナム（Robert Putnam）が，『哲学する民主主義（邦題）』（Making Democracy Work）[1] で，さらに概念化し，世界的にベストセラーとなり，単に社会学，政治学分野で取り上げられただけでなく，世界銀行などの国際金融，国際経済など多くの分野で，この概念を応用する試みが続けられている。

パットナムの前書は，イタリアの民主主義について分析したものであるが，ソーシャル・キャピタルを，「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴」としている[2]。この三者が，共通の目的を達成するための協調行動を導くものとされている。「ソーシャル・キャピタル」という新しい概念が，土地や，工場，機械などをあらわす物的資本や労働力などをあらわす人的資本などと並ぶ概念として，近年，世界的に注目を集めている。ソーシャル・キャピタルの射程は広範囲にわたっており，犯罪，コミュニティー，出生率，失業，自殺，社会運動，健康，政治参加，社会移動など，地域におけるソーシャル・キャピタルの効果が，現在，課題となっている[3]。

具体的には例えば，ソーシャル・キャピタルが豊かな地域ほど，失業率や犯罪率は低く，出生率は高く，また平均寿命も長く，新規開業率も高いという調査結果がある[3]。つまりソーシャル・キャピタルは，地域やコミュニティがかかえる様々な問題を解決する糸口となる可能性があると考えられる。

これまでのソーシャル・キャピタルに関する研究によると，自治会・町内会等の地縁的な活動を担う組織社会の接着剤とも言うべき強い絆や結束によって特徴づけられるソーシャル・キャピタルは，「結束型」と呼ばれ，内部志向的であるとされている。この性格が強すぎると「閉鎖性」や「排他性」につながる場合もあり得る。これに対してボランティア・市のＮＰＯ活動を担う組織などは「橋渡し型」ソーシャル・キャピタルと呼ばれる。「結束型」にくらべ，絆や結束はより薄いが，より「開放的」，「横断的」であり，社会の潤滑油ともいうべき役割を果たすとみられている。多くのソーシャル・キャピタルの議論において，後者の「開放的」なソーシャル・キャピタルが重要であるという基本的認識が展開されている[4]。

世代間交流を考えていく場合においては，高齢者，子ども，障がい児・者，問題をかかえた人々などを排除する理論ではなく，あくまでも包摂していく姿勢をとることを基本とする。

子育てネットワーク研究の地域研究班は，2007年度より，コミュニティが教育や生活に果たしている役割について，ソーシャル・キャピタルに注目し，小学校の保護者を対象に，調査研究を続けてきた。研究センター年報13号（草野他2008）[5] では，小平市のソーシャル・キャピタルについて考察した。紀要45号（草野・瀧口2009）[6] では，「人間への信頼とソーシャル・キャピタル」の関係について分析し報告した。総理府

の第１回から第３回の調査結果を比較・参考にしながら，他人への信頼度の高い人は，日常生活に満足している割合が高く，人とのつながりが豊かであることを確認した。また，他人を信頼しているほど学校への信頼も高かった。

今回の研究は，小平市と品川区のクロス集計で比較を行い，地域ネットワークとソーシャル・キャピタルの関係を明らかにすることをねらいとした。

2. 調査概要

調査項目：地域ネットワーク調査は，全てで34項目８頁にわたっている。そのうち７項目は独自に追加したものであるが，残りの27項目は内閣府が2004年及び2007年に調査を実施したものであり，小平市は2007年10月から12月にかけて，品川区は2008年６月から７月にかけて行った。

項目群は，１．他人への信頼について，２．日常的なつき合いについて，３．地域での活動状況について，４．自身の生活状況と個別の機関や人への信頼について，５．学校と地域との結びつきについて，６．回答者の属性についてであった。

調査対象：　小平市では小学校２校に在籍する子どもの全家庭に向けて，小学校の保護者に依頼した。品川区では，区内の２つの小学校に校長を介して，各クラスの担任から，保護者に依頼した。調査表はどちらも同じものを使用した。

調査実施期間：小平市は2007年10月末から11月はじめと12月に，品川区は，2008年６月から７月にかけて行った。

調査方法（配布と回収）：調査協力小学校は，小平市と品川区それぞれ２校である。小平市（人口18万人）での配布数は872枚，回収率は30.2%で，品川区（人口35万人）での配布数は1209枚，回収率は48.6%であった。回収は，小平市は担任の先生方を通じ，品川区は品川区の教育委員会を通じて行った。

統計処理は，ＳＰＳＳ統計パッケージを使用し，クロス集計はＥＸＣＥＬ 2003で行い，２群間の独立性を検証するために比率の差を検討するカイ２乗検定をＰＡＳＷ　Statistics 18を使用して行った。

3. 結果と考察

(1) 人は信頼できるか否かによる分析

他人への信頼について，小平市および東京都品川区で人を信頼できると思うか，それとも注意した方がよいかについて，総理府の調査に基づいて以下のように，分類した。

「1」をほとんどの人が信頼できる，「9」を注意するに越したことはないとし，その中間を「5」としたとき「1」から「9」の９段階に分け，１～４を「信頼できる」６～９を「注意する」と分類し，分析に使用した。

a.　ボランティア・NPO・市民運動の活動頻度

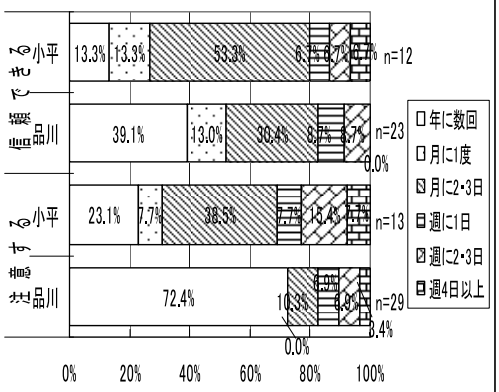

図2 ボランティア・NPO・市民運動の活動頻度

ボランティア・NPO・市民運動の活動頻度を見てみると，品川・小平それぞれにおいて，「信頼できる」では，小平は「月に2･3日」(53.3%）の割合が最も多く，品川でも「月に2･3日」（30.4%）を選んだ割合が最も多い。

また「注意する」では，小平は「月に2･3日」（38.5%）の割合が最も多く，品川は「年に数回」(72.4%）を選んだ割合が最も多い。（χ^2値=10.806, .05<p<.10）

b.　スポーツ・娯楽・趣味の活動意向

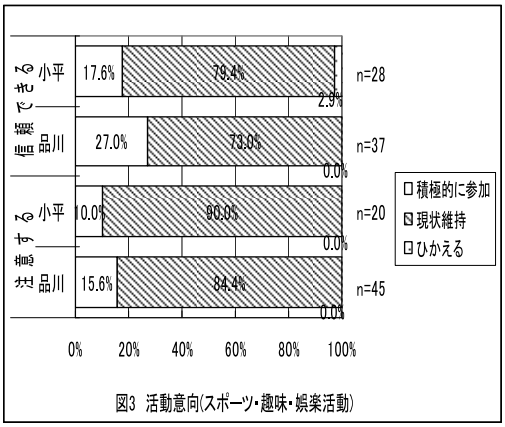

図3　活動意向(スポーツ・趣味・娯楽活動)

スポーツ・趣味・娯楽活動の活動意向をみてみると，「信頼できる」では，小平・品川共に，「現状維持」を選んだ人が最も多く，全体の 7 割から 8 割を占めている（χ^2 値 =28.531, p<.01)。

また,「注意する」でも同様に, 小平・品川共に「現状維持」を選んだ人が最も多く，小平は全体の 9 割，品川は全体の 8 割弱を占めている（χ^2 値 =37.895, p<.01)。

(2) 付き合っている人の数について,「1 ～ 4 人」を少ない,「5 ～ 19 人」を中ぐらい,「20 人以上」を多いと分類して，小平市と品川区について比較するためにクロス集計を行なった。

a.　学校と地域との結びつき

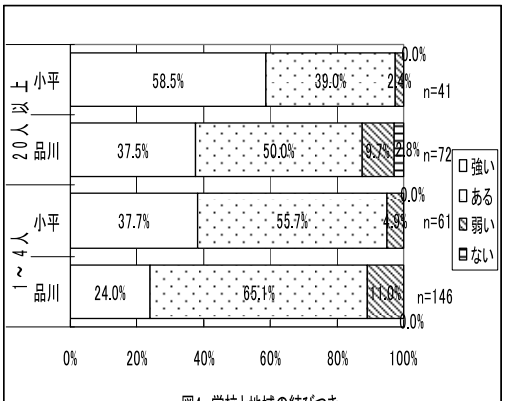

図4　学校と地域の結びつき

学校と地域の結びつきについてみてみると，小平市では「20 人以上」では，「強い」(58.5%) が最も多く, 次いで「ある」(39.0%) となっており，両者合わせると全体の 9 割以上を占めている。また「品川」では「ある」(50.0%) が最も多く，次いで「強い」(37.5%) となっており，全体の 9 割弱を占めている（χ^2 値 =6.342 , .05<p<.10)。

付き合っている人が「1 ～ 4 人」では,「小平」,「品川」共に「ある」が最も多く, 次いで「強い」となっている。両地域を比較すると，小平市の方が，学校と地域との結びつきが強いことがうかがえる。

b.　性別

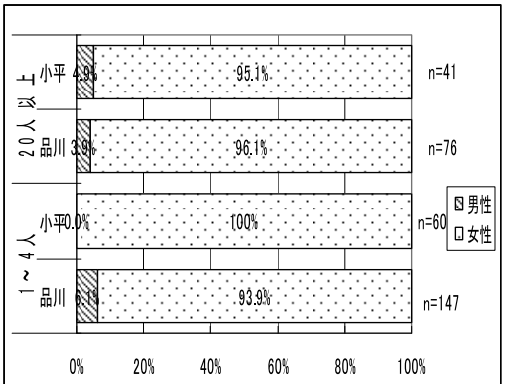

図5 性別

人との付き合いを性別で比較してみたが，元々，男性の回答者数が少ないので，有意差は出ているが，さらなる言及は控える。

c.　現在の住居に住み続けること

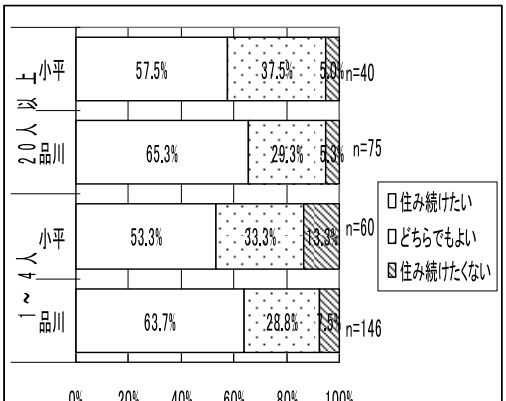

図6 現在の住居に住み続けること

現在の住居に住み続けることについて見てみると, 付き合っている人が「20 人以上」で,「小平」,

「品川」共に「住み続けたい」とする人が最も多く，「小平」は全体の約 6 割，品川では約 7 割を占めている。

また, 付き合っている人が「1 ～ 4 人」では,「20 人以上」と同様に,「小平」,「品川」共に「住み続けたい」が最も多いが,「小平」は全体の約 5 割,「品川」は約 6 割を占めている（χ^2 値 =6.278 , p<.05）。

特に，品川区の回答者が，つきあっている人の数にかかわらず，現在の住居に住み続けたいと考えている傾向が見られた。

d.　収入

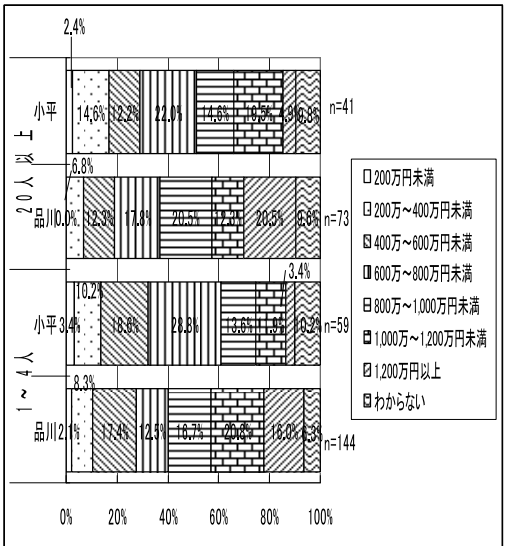

図7 収入

収入についてみてみると，付き合っている人が「20 人以上」で,「小平」では「600 万～ 800 万円未満」が最も多く，ついで「1,000 万～ 1,200 万円」となっている。「品川」は「800 万～ 1,000 万円」と「1,200 万以上」が同割合で最も多い。特に「200 万円未満」はまったくいないという結果になっている。

「小平」では, 付き合っている人が「1 ～ 4 人」で,「600 万～ 800 万円未満」が最も多く，全体の約 3 割であり，次に多い「400 万～ 600 万円未満」も約 2 割を占めている。「品川」は「1,000 万～ 1,200 万円未満」が最も多い。次に多いのが「400 万～ 600 万円未満」と「800 万～ 1,000 万円未満」となっており，数パーセントの差しかない。「200 万円未満」は 2％程度となっており，他の項目と比べると非常に少ない（χ^2 値 =15.302 , p<.05）。

両地域を比較した場合には，都心である品川区の方が，概して収入が多くなっている。

(3) 日常生活の満足度の違いによる分析

研究年報 14 で瀧口・森山が「生活への満足度と属性について」[7] で品川区の分析を行っている。今回は，品川区と小平市を比較分析し，小学生を育てている親の地域による傾向の違いについて注目をする。

日常生活の満足度については 5 段階から選択してもらった。「非常に満足している」「満足している」「やや不満足である」「不満足である」「どちらともいえない」である。

「非常に満足している」「満足している」を合わせると，品川区が 67%，小平市が 59.7% で内閣府の全国調査 [4] の 54.8% に比較して，両地域とも生活への満足度は高く，品川区は小平市よりも 7 ポイント以上高い。

a.　他人への信頼

山岸俊男は「他者一般を信頼する程度の高い『高信頼者』は相手が信頼できるかどうかについて敏感であり，また相手が信頼に値する行動をとる人間であるかどうかより正確に判断できる」[8] と示唆している。山岸の日米の比較調査によると日本人は信頼には安心感が伴うという。山岸の考察を参考にすると，生活に満足感がある人は，他者への信頼が強いと推測される。

「信頼する」の中で，満足している人は，品川区で 77.9%，小平市が 73.5% で，生活に満足感がある人は，他者への信頼が共に高い傾向であることが確認できた。逆に不満足と答えた人は,「注意する」と回答した人が多い。

また，相関係数は品川区が $p < 0.188$ (**)，小平市が $p < 0.199$ (**) で共に有意であった。

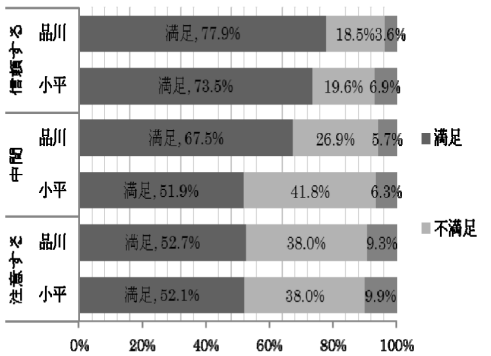

図8　満足度と他者への信頼

b.　つきあいの程度

近所とのかかわりの程度について質問した。「互いに相談したり日用品の貸し借りをする」「立ち話をする程度」「あいさつ程度」「まったくしていない」の 4 つから選択してもらった。品川区，小平市共に立ち話程度のつきあいが 45% 前後，小学生を持つ親は，何らかのかかわりを近所と持っていることが分かった。

生活に満足感が高い人は，「貸し借りをする」つきあいを品川区が 70.6%，小平市が 67.5% で，ほぼ同じ割合でしている。また「どちらともいえない」と回答した人は，品川区は「あいさつ程度」のつきあい，小平市は「立ち話をする程度」のつきあいが多い。不満感を抱いている人のつきあいの程度は，「あいさつ程度」が多かった。

相関係数は品川区が $p < 0.141$（**），小平市 $p < 0.129$（*）で共に有意であった。

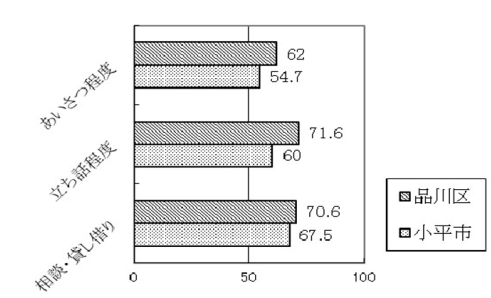

図9　生活の満足度と付き合いの程度

c.　地域での活動状況の有無

地域別で自治会やスポーツ，ボランティアなどのいずれかの活動の参加の有無を調べた。何らかの活動に参加している人は，品川区が 45.1%，小平市が 80.9% と参加率は小平市がかなり高い。

しかし，生活に満足している人に注目すると，品川区が 72.2%，小平市が 62.0% で傾向が逆転する。品川区では，生活に不満を感じている人の活動への参加率が小平市よりも 8 ポイント低い。

田畑稔は，ソーシャルキャピタルの一部とされるアソシエーションの定義として，マルクスを紹介する際に「自由意志」「自由な個人性」による人とのつながりの実現をあげている。[9]　品川区の傾向は，満足度の高い人は自由意志によって人とつながっていることを推測させる。

相関係数は，品川区が $p < 0.084$（*），小平市が $p < 0.131$（*）で共に有意である。

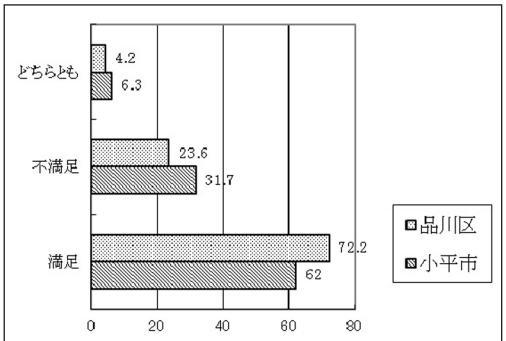

図10　生活の満足度と活動の有無

d.　日常生活の心配ごとの相談先

日常生活の問題や心配事について，相談したり頼ったりする人や組織について尋ねた。品川区と小平市共に有意な相関がみられたのは，学校などの教育機関，病院などの医療機関，警察や交番など，自治会などの地縁団体，近所の人々，家族，親戚，友人・知人と 12 項目のうち 8 項目で共通して有意な相関があった。また，品川区では，12 項目すべてで有意な相関を確認した。

生活に満足している人で自治会などの地縁団体をある程度頼りになると回答したのは，品川区が

77.7%，小平市が 70.5% と品川区がやや高い割合になっている。

全ての項目で，満足感の高い人は，品川区が小平市よりもポイントが高い結果となった。図 11 から確認できるように，満足している人で，地縁的な活動への参加割合は小平市が高かったにもかかわらず，自治会が頼りになると回答した人は，品川区が高い。品川の方が，住環境・生活環境への心配が小平に比較して 19 ポイント高いことを考え合わせると，コミュニティへの関心がやや強いとも読み取れる。

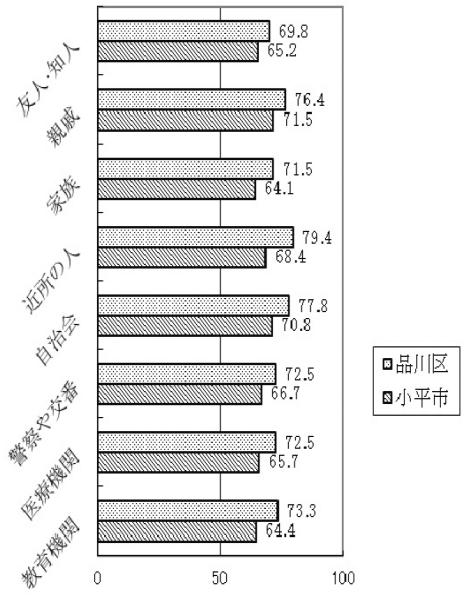

図11 生活の満足度と相談先への信頼

(4) 居住年数の分析

内閣府経済社会総合研究所が株式会社日本総合研究所に委託した全国調査結果によると，信頼・ネットワーク・活動などが多い・活発な人の属性に居住年数があげられている[3)]。 居住年数が長い人ほど他者への信頼度が高まるという分析がされている。

選択肢は,「1 年未満」「1 ～ 2 年」「2 ～ 5 年」「5 ～ 10 年」「10 ～ 20 年」「20 年以上」の 6 つである。

a. つきあっている人の数

居住年数が長くなるほど，近所と付き合っている人の数は増加する。「10 年～ 20 年」居住している人で 20 人以上の人とつきあいがある人は，品川区が 14.8%, 小平市が 24.3% で「20 年以上」の人の割合はさらに高い。

相関係数は，品川区が $p < -0.191$（**），小平市が $p < -0.210$（**）で有意であった。

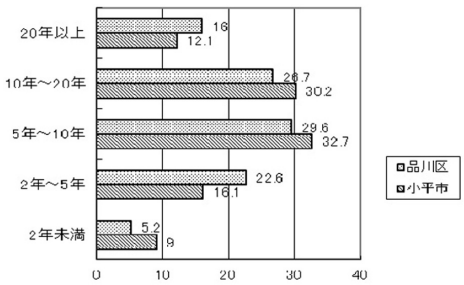

図12 居住年数と付き合う人の数

b. 日常生活上の問題や心配の内容

日常生活を送るにあたっての問題や心配事を尋ねた。9 項目で当てはまるものすべてを選んでもらった。健康や子育て，教育，犯罪や非行なども選択肢に入れた。

小平市では 2 項目に有意な相関が見られた。「近隣での人間関係」と「近隣の住環境・生活環境」である。

居住年数による顕著な違いははっきりしなかった。小平市では住環境の心配は，10 年以上住んでいる人には少ない傾向が見られた。それに対し，品川では住環境の心配は逆の傾向となっていて 10 年以上が高い。

c. 現在の住居に住みつづけること

現在住んでいる地域に住みつづけたいかどうかについて尋ねた。住みつづけたいと考えている人は，品川区が 71.2%，小平市が 56.9% で，品川区の方が「地域外に引越したい」「どちらでもいい」と回答する人は少なかった。

居住年数すべてにおいて，品川区の方が，現在

の地域に住みつづけたいと考えている。2年未満の居住者を比較すると，「引っ越したい」と考える人は，小平24%に対して品川は4%にとどまっている。この傾向は，調査依頼した小学校の人気が高いことや品川区は利便性が高いこと，また，2009年に発表された「品川区基本構想」の地域定住化の促進が反映しているとも読み取れる。

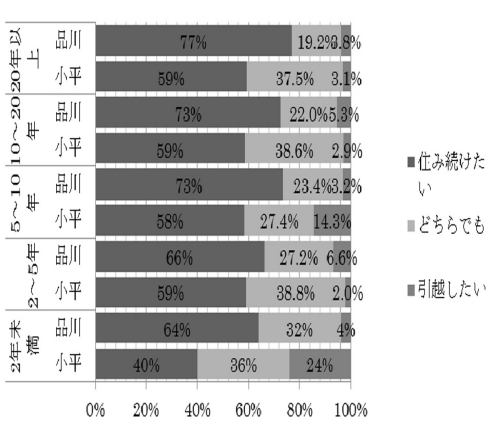

図13 居住年数と住み続けたいか

(5) 相関および重回帰分析による解析

(5)－1 解析方法

a. 質的変量と量的変量の変換

人を対象とする調査で得られる回答の多くは質的変量のため，そのまま相関を求めたり，重回帰に供することはできない。また，量的変量に変換することが難しい変量も少なくない。そこで，比較的量的変量に変換しやすいデータとして，表Iに示した19変量を選択した。表Iに従い，本調査の回答を範囲に当てはめて量的変量に変換した。

未記入や変換不可能な回答がある場合，その回答全体を解析から除外した。そのため，全850票のうち，小平市198票，品川区417票，計615票が有効回答として解析に用いられた。

b. 相関係数

得られた19変量の各組み合わせに対して相関係数を求めた。得られた相関係数に対して，無相関（相関が0）の検定も行った。重回帰分析に対応する部分の結果を表II（小平市），表III（品川区）にそれぞれ示した。

変量		表記	範囲
信頼	一般	信頼1	−4～4
	旅先	信頼2	
日常生活		満足度	−2～2
日常付合		人の数	0～25
相談や頼りにする	組織	市役所	−2～2
		教育機関	
		医療機関	
		警察	
		自治会	
		NPO	
	人	近所	
		家族	
		親戚	
		友人	
自身のこと		年齢	17～72
		居住年数	0.5～25
		家族人数	1～6
		収入	150～1300
		希望収入	

表1 回答からの数値への変更

c. 重回帰分析

“信頼1”，“信頼2”および“満足度”を目的変量，それ以外の変量を説明変量として重回帰分析を行った。重相関では目的変量を説明するために，各説明変量がどの程度寄与しているかの度合いを標準回帰係数として得られる。この標準回帰係数に対して，標準回帰係数が0の検定を行った。また，説明変量全体でどの程度目的変量を説明できているかを示す重相関係数も算出し，重相関係数0の検定（F検定と同等）も行った。

(5)－2 解析結果

a. 小平市・品川区間の相似項目

「信頼1」と「満足度」に0.2程度の有意な相関が見られる。どちらの地域とも，生活に満足している人ほど，他人を信頼する傾向があると言える。

同様に「人の数」と「居住年数」の間にも 0.2 程度の有意な相関が見られる。長年居住している人ほど，日常的に付き合っている近所の人の数が多いことが分かる。

「満足度」と「人の数」の間には 0.1 程度の弱い相関が見られた。一方重回帰の結果では，「満足度」に対する「人の数」の標準回帰係数はどちらの地域とも有意ではなかった。満足度に対して，人の数が寄与しているとは結論づけることはできない。

「満足度」と「居住年数」の間には，相関係数，標準回帰係数ともに有意ではなかった（ゼロと見なしうる）。これは，「居住年数」が生活の「満足度」とはほとんど関係がないことを示していると言える。ただし，関係がないのであって，「居住年数」が少ないほど「満足度」が高い，という逆相関の関係ではないことに注意が必要である。

変数	信頼1	満足度	人の数	居住年数
信頼1	−	0.230***	0.222***	0.148*
満足度	0.230***	−	0.117*	-0.006
人の数	0.222***	0.117*	−	0.195**
居住年数	0.148*	-0.006	0.195**	−

***p<0.001,　**p<0.01,　*p<0.05

表Ⅱ　相関（小平市）

変数	信頼1	満足度	人の数	居住年数
信頼1	−	0.261***	0.078	0.011
満足度	0.261***	−	0.098*	-0.032
人の数	0.078	0.098*	−	0.227***
居住年数	0.011	-0.032	0.227***	−

***p<0.001,　**p<0.01,　*p<0.05

表Ⅲ　相関（品川区）

b.　小平・品川区間の相違項目

「信頼１」と「人の数」に関して，小平市では 0.222 の有意な相関であった。これに対し，品川区では 0.078 であり有意な相関とは認められなかった。「信頼１」と「居住年数」の間も同様に，小平市で有意な相関が認められ，品川区では認められなかった。このことは重回帰分析の結果からも支持することができる。「信頼１」を目的変量とした重回帰分析の結果を見てみると，「人の数」の標準回帰係数が小平市で 0.108，品川区では 0.020 となった。「居住年数」では小平市で 0.071 となり，品川区は 0.028 であった。どちらの場合においても，小平市の標準回帰係数が充分な有意性を持っているとは言い切れないが，「信頼１」に対する「人の数」や「居住年数」の重みが品川区に比べて小平市の方が大きいと言うことができる。

付き合っている「人の数」の内訳は，両地域間で差が見られなかった。しかし，小平市の方が，日常的な付き合いとして「日用品の貸し借り」が品川区に比べて多く，付き合いの質的な差が見られている。このような付き合いの質的な差が，「信頼１」へ寄与しているものと考察される。「居住年数」が長くなると，自然に近所の知り合いの「人の数」が増えてくるものであるから，「居住年数」は「人の数」を介して間接的に寄与しているのではないかと思われる。

(6)　総合考察

今回の調査では，小平市・品川区の小学校２校に各々依頼した。それぞれの地域性を反映するには至らないが，コミュニティスクールに取り組んできた小平市，先進的な品川区に在住する親の特徴的な傾向は見えてきた。

a.　他人への信頼には満足感・つながり

他人への信頼感と日常生活の満足度について両地域共に強い相関があった。生活に満足をしている人は品川がやや多く，不満足な人は注意する人

に多かった。

また，内閣府の委託調査では他人への信頼と居住年数に属性傾向がみられたが，今回の分析では，小平市でやや弱い有意な相関があった。

b.　つきあいの人数と地域の結びつき

つきあっている人数と学校と地域へのかかわりについて有意差が確認された。20 人以上と近所づきあいをしている人は学校と地域の結びつきを強く感じている。

また，つきあいの人数と居住年数には品川と小平ともに強い相関がみられた。現在の居住地域に住みつづけたいと考える人は，品川ではつきあっている人数に関わらず，現在の地域の居住を希望している。

近所づきあいが多いことは，居住環境や生活への安心感・満足感などが豊かであることを調査結果は示唆している。

c.　品川と小平のソーシャルキャピタル

近所でつきあっている人の数や居住年数，現在の地域に住み続けたいという思いは，学校と地域のつながりに反映されていた。品川の方が年間収入や最終学歴は高く，日常生活に満足している人も多い傾向が見られ，自由意思による活動へのかかわり方が推測された。

パットナムは，「社会関係資本は，子どもの成長がうまくいくかどうかにとって非常に重要である」「社会関係資本は，財政的，教育的資源が少ない家庭にとって最も重要なものになりうる」と『孤独なボウリング』に記している。[10)]

人とのつながりが小学生を育てている親にとって重要な意味があることは，調査結果の傾向からも読み取れる。パットナムの示しているソーシャルキャピタルと重なっていると言えるだろう。

「地域ネットワークとソーシャルキャピタルの関係を明らかにすること」という当初のねらいからすれば十分とは言えないまでも，一定の相関を見出すことができたのではないだろうか。

ソーシャルキャピタルは，「社会関係資本」と訳されることが多いが，「人間発達資源」と置き換えられるように，ソーシャルキャピタルは，人は人との関係性の中で主体的に活き活きできるという思想がベースとなっている。それを保障していくために自治体は，ソーシャルキャピタルの概念を背景に，核家族化や独居世帯化によるつながりの希薄化に取り組み始めている。ソーシャルキャピタルが豊かである地域は，不登校や非行，虐待が少ないという調査結果を内閣府や世界銀行，自治体は指摘しているが，ソーシャルキャピタルは，安心して子育てができる街づくりをめざす人と人との関係の視点とも考えられる。そこでは，行政や自治会，NPO などが連携する地域ネットワークは重要な要素であって，人と人とを結束・橋渡しさせていく力となっている。

今回の調査は小学生の親を対象にした分析であるが，子どものソーシャルキャピタルを充実させていくには，地域ネットワークの役割が大きいことが一定程度，確認できたのではないだろうか。

4.　おわりに

今回の調査は，小学生を育てている親を対象にした調査であったが，地域ネットワークの調査研究としては，今後，就学前，中学生，高校生を育てている親への調査が必要になるだろう。人とのつながりを核に置くソーシャルキャピタルの向上に向けて，地域がつながりあっていく子育て・教育・福祉の要因を把握することが課題である。

3 月に起きた東日本大震災は，社会的なつながり，ソーシャルキャピタルの重要性を身近なものとして感じることにもなった。改めて本学のある小平周辺地域に目を向け，ソーシャルキャピタルの可能性に寄与していきたい。

文献

1)　ロバート・パットナム（Robert Putnam）　河田潤一訳　2001　『哲学する民主主義(Making Democracy Work)』　NTT 出版

2) 日本総合研究所　2008　日本のソーシャル・キャピタルと政策―日本総研 2007 年　全国アンケート調査結果報告書
3) 日本総合研究所　2005　コミュニティの機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書　内閣府委託
4) 稲葉陽二 2008　ソーシャル・キャピタルの潜在力　日本評論社
5) 草野他　2008　地域ネットーワークに関する調査研究 白梅学園大学 短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 No.13
6) 草野･瀧口眞　2009　人間への信頼とソーシャルキャピタル 白梅学園大学・短期大学紀要第 45 号
7) 森山・瀧口 2009　生活の満足度と属性 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14
8) 山岸俊男 1998　信頼の構造　東大出版会
9) 田畑　稔 2011　歴史の中のアソシエーション 歴史評論 2011 年 2 月号 730　校倉書房
10) ・ロバート・D・パットナム　柴内康文訳 2006　孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生　柏書房

＜以下参考文献＞

・日本総合研究所 2002　ソーシャル・キャピタルー豊かな人間関係と市民生活の好循環を求めて　内閣府委託
・森山・瀧口 2009　社会的ネットワークとソーシャルキャピタル 白梅学園大学・短期大学紀要第 45 号
・森山・瀧口 2010　社会への意識とソーシャル・キャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.15
・草野・瀧口眞 2009　人間への信頼とソーシャルキャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14
・草野・瀧口眞 2010　人間への信頼とソーシャルキャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.15
・永富聡・藤澤由和 2009　ソーシャル・キャピタルの地域的特性　経営と情報第 21 巻 第 2 号